

# 大学生初年次の英語に関する意識調査

## — 名古屋芸術大学における全学共通科目「英語1」受講生 に対するアンケートより —

*A Survey on English Learning*  
— Focusing on First-year University Students at Nagoya University of the Arts —

松崎 久美 MATSUZAKI Kumi  
(デザイン領域)

### はじめに

本論文は、名古屋芸術大学全学総合共通科目「英語1」(2020年度前期開講)受講者を対象に行った「英語学習に関するアンケート」の調査結果報告である。本調査の結果分析から、①適切な教授法、教育実践、②効果的なシラバスや教材、について検討し授業改善に役立てることを目的としている。また、同学生の海外や留学に対するこれまでの経験と興味に関するアンケートにも言及し、本学で展開している国際化と語学教育を課程内外で有機的に運営し、成果を出すための枠組み構築に向けた示唆を得た。

### 本学における英語教育とアンケートの目的

グローバルな人や物のフィジカルな往来や、インターネットを介した国境のない電子的な金融、物、情報の移動が活発になる中、英語は国際共通語(リング・フランカ)として中心的な役割を担っている。世界で英語を公用語・準公用語としている国は54か国になり21億人が使用している<sup>1)</sup>。さらに、外国語としての英語(English as a Foreign Language)の学習者が存在し、その数は増え続けている<sup>2)</sup>。インターネット上で使用されている言語も英語が最も多い<sup>3)</sup>。このように、英語はコミュニケーションや表現の発信としての役割だけでなく、最新の情報や技術を収集したりデジタルツールを駆使したりする際にも必要な言語となっている。英語は、国家間を移動することなく世界を広げるために欠かせない手段となっている。

この世界の流れに呼応して、日本では文部科学省が「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」<sup>4)</sup>を打ち出し、小学校低学年から「聞く、話す」が中心の活動型、高学年になると「読む、書く」を含む教科型の英語教育が導入されることが決定した。英語教育の低年齢層化が進んでいる。英語の4技能(読む、書く、話す、聞く)を使って「何ができるようになるか」という運用能力の育成を目的としており、その評価が大学入試でも求められている。大学教育では、ICTを活用した国境をこえた教育プログラムや海外の大学との共同学位制度などに対し積極的に補助金が交付され、英語によるコミュニケーショ

ンを土台とした専門的な教育実践が求められている<sup>5)</sup>。

将来の活躍の場が国内外問わずボーダレスな音楽や美術分野の学生を育成する芸術学部、小学校教員、幼稚園教諭、保育士を目指す人材を育成する人間発達学部を擁する本学にとって、コミュニケーションツールとして英語を運用できる人材を育成することは、専門教育に付加価値を与えると考えられる。そのため、本学では、全学総合共通科目一般科目群で日本人講師による「英語1」「英語2」（以下、「英語1、2」）及びネイティブ教員が中心となる「コミュニケーション英語1」「コミュニケーション英語2」（以下、「コミュ1、2」）を設置し、全1年生に必須科目としている。さらに上級レベルの「英語3」、「コミュニケーション英語3」を選択科目で配置している。また、共通科目内の横断科目群には、芸術教養領域の「英語リテラシー1」、「英語リテラシー2」が当該領域以外の学生も履修できるように開設されている。

「英語1、2」は主に読み書きを中心とした、総合的な英語力を育成することを目的として、「コミュ1、2」は、リスニングとスピーキングに重点を置いた内容となっており、各8クラスあるが、全クラス教育内容は共通化されている<sup>6)</sup>。つまり、1年次は全学生に対し一般的な目的のための英語教育（English for General Purposes 以下、EGP）のカリキュラムを適用して、英語の基礎を習得させる狙いがある。1年次の必修科目のクラスは、入学時に新入生全員に対しレベルチェックテストを課し、その結果で習熟度別のクラス編成をしている。（今年度は、COVID 19の影響により入学時のレベルチェックテストを一斉に学内で実施することができず、各自自宅で受検する形式となった。そのため、約2割の学生がチェックテストを受けずにクラス分けをすることとなった。）結果の詳細な概要は今回の目的ではないが、本学の新入生の約半数以上が、CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment：外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠、以下CEFR）のA2レベルに該当し、それは高校卒業レベル相当となる<sup>7)</sup>。

EGPを目的とした必須科目に加え、専門科目内に専門に特化した英語関連科目（特定目的のための英語：English for Specific Purposes, 以下ESP）が選択科目で用意されている。英語が教授言語となっている授業（English Medium Course）は開講されていないが、英語学習者にとって、段階的にレベル・内容ともに発展させるカリキュラム構成となっている。しかし、上級生になると、それぞれ専門の課題や資格取得に向けた課題等で多忙になるせいもあり、選択科目の上級クラスは例年受講者が少ない。上級レベルへと促し、継続的に英語を学びたいと思う動機付けが育つような英語教育を、1年生の段階で提供することは重要だろう。Woodrowによると、EGPの学習者の動機は多様で、学校で提供される場合は、学校の義務科目であり学生は動機に欠けていて、講義内容は受講者のニーズや受講者が遭遇しそうな状況を反映していない場合がある、と述べている<sup>8)</sup>。そのため、本アンケートにより学生の入学時の「英語に対する意識」全般を調査することは、学習者に

沿った授業実施方法と授業設計への示唆を見出すことができると考えられる。

## 調査の実施

本研究で使用するデータは、「英語1」（2020年前期開講）受講生対象に実施した「英語学習に関するアンケート」のデータである。調査対象者は、「英語1」を履修する芸術学部と人間発達学部の新1年生600人で、過年度履修者は調査結果に入れていない。

調査方法は、今年度から本学で採用した Google Classroom から Google Forms を使用して行った。調査実施時期は、前期授業が開始した2020年5月で、回答者数は440名（回収率約73%）であった。

所属別回答者数と回答率は、芸術学部芸術学科ではデザイン領域が136名（対象者213名）、美術領域25名（80名）、芸術教養領域28名（28名中）、音楽領域205名（207名）、人間発達学部こども発達学科が46名（47名）となる。一部のクラスで Google Forms の設定問題により学生が回答を提出できなかったため提出状況にバラ付きが出たが、本学の新生の全体像を捉えるには十分な回収ができた。また、学期末に一部のクラスのみを実施した「海外渡航歴及び留学に関するアンケート」結果についても参考資料として提示する。本データは、一部クラスとポータルサイトで「後期の英語2授業の実施方法と改善点に関する質問」を行った際に、補足質問として追加したものである。

## 調査結果概要

調査項目は以下の5点である。①から③は、Google Forms の5段階尺度の均等目盛フォームを利用し、反対語の対になる評価を1と5に設定して該当する段階を選ぶ形式で実施した。④は選択肢回答法を用いたが、「その他」の回答を設け自由記述ができるようにした。⑤の質問は多様な分野を専攻する学生がいることを考慮し、自由記述とした。

- ①英語は好きか
- ②英語は得意か
- ③英語を上達させたいか
- ④上達させたいスキル
- ⑤英語ができればやってみたいこと

### ① 英語に対する意識

最初に、「英語は好きですか?」という単純な質問から始めた。「1（嫌い）から5（好き）」の均等目盛を利用して回答を得た（表1）。結果は、中心地の「3」が一番多

表1 「英語は好きですか?」

領域・学部	1 (嫌い)	2	3	4	5 (好き)	総計
美術	3	9	5	7	1	25
デザイン	31	41	39	18	7	136
芸術教養	2	4	8	10	4	28
音楽	36	42	69	43	15	205
人間発達	8	13	21	2	2	46
総計	80	109	142	80	29	440

かったが、(嫌い)側の「1、2」の回答が多く、平均値は2.7だった。総合的に見るとわずかだが「嫌い」の傾向が強い。属性別に見てみると、美術、デザイン領域で(嫌い)側の回答が最大値となっていた。特にデザインでは「1、2」の回答が半数を超えて他領域・学部より「嫌い」の傾向が強い。また芸術教養のみ「4」(好きに近い)回答が一番多かったのは他の領域・学部と異なり特徴的であった。

② 英語に対する認識

次に、「英語は得意ですか?」という質問に対し、「1(苦手)から5(得意)」の均等目盛を利用して回答を得た(表2)。結果は、「1、2」のネガティブな回答をした学生が78%を占め、大学入学時点で英語に対してネガティブな感情を持っている学生が大多数であることが明らかになった。特に、芸術教養領域以外は、全て最大回答数は「1(苦手)」をマークしている。

質問①と②の相関関係を見るためにクロス集計をした(表3)。結果は予想通りだったが、英語が嫌いな学生

表2 「英語は得意ですか?」

領域・学部	1(苦手)	2	3	4	5(得意)	総計
美術	15	4	5	1	-	25
デザイン	82	36	14	4	-	136
芸術教養	8	6	10	3	1	28
音楽	87	68	33	14	3	205
人間発達	21	16	7	2	-	46
総計	213	130	69	24	4	440

表3 質問①と②のクロス集計

学部・領域	英語は得意ですか?	1 苦手	2	3	4	5 得意	総計
	英語は好きですか?						
美術	1(嫌い)	3	-	-	-	-	3
	2	7	2	-	-	-	9
	3	2	-	3	-	-	5
	4	3	2	1	1	-	7
	5(好き)	-	-	1	-	-	1
美術 集計		15	4	5	1	0	25
デザイン	1(嫌い)	31	-	-	-	-	31
	2	27	12	2	-	-	41
	3	18	16	5	-	-	39
	4	4	8	4	2	-	18
	5(好き)	2	-	3	2	-	7
デザイン 集計		82	36	14	4	0	136
芸術教養	1(嫌い)	1	-	-	-	1	2
	2	2	2	-	-	-	4
	3	3	3	2	-	-	8
	4	2	1	6	1	-	10
	5(好き)	-	-	2	2	-	4
芸術教養 集計		8	6	10	3	1	28
音楽	1(嫌い)	34	2	-	-	-	36
	2	27	14	1	-	-	42
	3	19	33	17	-	-	69
	4	6	16	13	8	-	43
	5(好き)	1	3	2	6	3	15
音楽 集計		87	68	33	14	3	205
人間発達	1(嫌い)	8	-	-	-	-	8
	2	8	5	-	-	-	13
	3	4	10	7	-	-	21
	4	1	1	-	-	-	2
	5(好き)	-	-	-	2	-	2
人間発達 集計		21	16	7	2	0	46
総計		213	130	69	24	4	440

と苦手と感じる学生は合致するケースが多い。一方で、英語が好き（回答4、5）でも、苦手と感じている学生が多いのは、本学の入学生の特徴かもしれない。

③ 英語のスキルアップに関する問い

ここまでの調査では「英語＝嫌い、苦手」というネガティブな反応が目立っていたが、③「英語が上手になりたいですか?」という質問と④「英語のどのスキルが上手になりたいですか?」という問いに対しては前向きな回答が目立った。③の英語のスキルアップに対する問いは、

表4 「英語が上手になりたいですか?」

学部・領域	1 いいえ	2	3	4	5 はい	総計
美術	-	-	5	9	11	25
デザイン	-	1	24	56	55	136
芸術教養	1	-	1	9	17	28
音楽	-	9	30	72	94	205
人間発達	-	-	6	14	26	46
総計	1	10	66	160	203	440

「英語が上手になりたいですか?」という問いに対し、「1（いいえ）から5（はい）」の均等目盛を利用して回答を得た（表4）。この結果をみると90%以上の学生が「4、5」を選んでおり、学生は英語力の向上を目指しており、英語力の必要性や英語力が彼らの将来に何らかの影響を与えることを漠然と感じている可能性がある。また、「嫌い」だから「苦手」なのではなく、「苦手」なので「嫌い」と感じている学生が多いかもしれない、という示唆を残した。

④ 英語のスキルに関する問い

「特にどのスキルが上手になりたいですか?」という問いに対し、

- 1 英語が書けるようになりたい（メールとか、作品の説明、チャットなど）
- 2 英語が聴けるようになりたい（映画、ラジオ、歌、テレビ、友達との会話など）
- 3 英語が読めるようになりたい（新聞、作品の説明、本、SNS、記事など）
- 4 英語が話せるようになりたい（友達との会話、作品の説明、旅行など）
- 5 上記の全て

で回答を得た。その結果が表5になる。総合的に英語力をアップしたいと考えている学生が多く、次に、「話す」「聴く」のコミュニケーションに関係する分野が多いのが特徴と言えます

表5 「どのスキルが上手になりたいですか?」

学部・領域	英語が書ける	英語が聴ける	英語が読める	英語が話せる	左記全て	総計
美術	-	7	9	5	3	25
デザイン	11	32	28	23	42	136
芸術教養	1	6	4	4	13	28
音楽	9	46	30	56	64	205
人間発達	1	9	7	18	11	46
総計	23	100	78	106	133	440

る。また、調査数は少ないが、美術領域のみ「読める」のスキルが最多数回答だったのも、学生像を映し出しているかもしれない。

#### ⑤ 英語ができればしたい事について

最後に、「英語ができれば……したい事（留学したい、海外で働きたい、友達を作りたい、字幕なしで映画を観たい……など）を、実際にしている自分をイメージして自由に書いてください」という問いを出した。自由記述のため、一度全ての回答を書き出してキーワードを抽出した。その結果、①「友人、コミュニケーション」、②「映画・音楽を原語で理解」、③「海外旅行、作品鑑賞」、④「原語で読む」、⑤「留学」、⑥「キャリア」、⑦「作詞、演奏」、⑧「SNS」、⑨「ゲーム」に分類した。①では、実際に会って話すだけでなく、SNSやゲームを通じてコミュニケーションをしたり友人を作りたい場合もカウントした。②の映画と音楽は異なるメディアだが、「歌詞や映画のセリフを字幕なしで聴いて理解できるようになりたい」という「聴いて理解」する共通点で統一した。③は海外旅行だけでなく「美術館」、「作品を観に行きたい」という海外に行く目的を同じカテゴリーにした。作品鑑賞でも、外出を目的とせず「作品の解説を原語で読んで理解したい」という内容は、本、雑誌、絵本、漫画などを「原語で読む」④のカテゴリーに追加した。⑤は期間を問わず、「留学」という言葉でカウントしている。⑥については、「海外に住みたい」「働きたい」「作品や歌を発表したい」など将来の活動に関係するものを抽出した。⑦は②の音楽を「聴く」のではなく、修得した英語力で、英語の歌詞を書いたり英語の歌を歌いたいという回答を集めた。⑧の「SNS」は、ただ単にSNSの内容を読んだり、書いて投稿するだけでなく、文脈に応じたメッセージの理解、応答も含まれるため、一つのカテゴリーとした。⑨のゲームは海外の「ゲームをプレイ」する回答とした。

集計結果を見ると「友人を作る」「英語で話してみたい」という回答が多く、コミュニケーションへの関心が高いことがわかった。また、「映画や音楽を聴く」ことに関心が高いことと合わせて、質問④でスキルアップしたい能力「話す」「聴く」とも関連している。音楽領域の学生は自身の専門にも関連する音楽の理解、演奏や作曲、留学・海外で働く、といった将来へと繋がるイメージを持っている可能性がある。逆に、国内で活用でき

表6 「英語ができればしたいこと」

	友人、コミュニケーション	映画・音楽を原語で理解	海外旅行、作品鑑賞	原語で読む	留学	キャリア	作詞・演奏	SNS	ゲーム
美術	4	7	5	5	4	3	-	1	-
デザイン	38	48	30	20	8	12	2	4	5
芸術教養	8	9	5	3	6	2	1		2
音楽	74	66	48	12	15	19	21	1	2
人間発達	26	10	15	3	5	1	1	1	1
総計	150	140	103	43	38	37	25	7	10

る資格取得を目指す学生が多い人間発達は、留学・海外で働くことへの興味関心は低い。

### 調査結果からの示唆

本アンケート調査から、本学に入学してくる学生の英語に対する意識について、概観と領域別の特徴を知ることができた。一部の領域のデータが少ないことから、その特色を捉えきれなかったとは言えないが、全学生が受講する全学共通英語において全体像を捉えることは、今後の授業改善と教育実践に活かすことができると考える。以下、特徴をまとめる。

- ① 学生は入学当時英語に対してネガティブな印象を持っているが「上達したい」という向上心が強い
- ② 「苦手だから嫌い」な可能性が高い
- ③ コミュニケーションを中心としたスキルアップと経験に関心が高い
- ④ 専門分野に関連したトピック、スキルに興味を持つ可能性がある（将来のキャリアも視野にいれた内容）

こうした点から、入学時のモチベーションを維持するような語学教育の展開が求められる。英語が「苦手」と認識している学生たちのモチベーションを維持し、自立した英語学習者として導き、英語が将来の可能性を広げる手段として成立するような視点である。授業計画では、EGPの枠組みを利用して一定レベルの英語力を強化しつつも、専門的な分野の興味が明確な学生が多いことを考慮し、専門に応じたトピックを扱い関心を高めるようなシラバスが考えられる。また、上級レベルは、より専門との関係を深めたESPをカリキュラムに取り入れることも検討したい。さらに、富山大学芸術文化学部のように、ESP理論を参考にした芸術系専門科目との連携強化<sup>9)</sup>も今後の課題と考えられる。

人間発達学部の学生は「将来のキャリアと英語」という視点があまり見られなかったが、今後英語教育の低年齢化がすすむ中、英語力が彼らのキャリアと直結する可能性があることを視野に入れた英語教育の提供が必要だろう。

教育実践としては「コミュニケーション」を重視したい。「友人を作りたい」「海外の人とコミュニケーションを取りたい」という希望から、実際に使用して成功体験を味わうことが語学への関心を高める可能性がある。本調査とは別で実施したアンケート（英語1の一部クラスの受講者を対象とした学期末アンケート）で、学生の海外経験は85%（327名中278名）の学生が「海外に行ったことがない」又は「海外旅行3回未満」だったことがわかった。こうした学生の背景を考慮すると、短期留学プログラムの充実やICTを利用したCOIL（Collaborative Online International Learning）の授業手法を取り入れて、学生を早い段階で世界に接触させるようなカリキュラムや教育実践が有効だと考えられる。直接世界と接触する経験は、語学への関心・スキル向上のみならず、異文化や多様な価値観を知るきっかけとなり、ボーダレスな社会で生きていく上で重要な知識と経験を得ることができるため、今の社会で求められているコンピテンシーの育成にもつながるだろう。

今回の調査は、本学の入学者の全体像を明確にし、学生の背景とニーズに対応するための英語教育の新たな実践方法とカリキュラムに関する考察を試みた。本結果を参考にし、本学の学生の入学時の高いモチベーションを維持するための英語教育の展開について具体的な議論をすすめていきたい。

#### 追記

本アンケートは、当初から予定して設計されたものではなく、コロナ禍により急遽 Google Classroom を使用した遠隔授業になったため、教員側も学生側も準備が十分できていない中、多様な機能を使うための練習も兼ねて実施を計画したものだ。多忙かつ混沌とした中、英語1を担当する4名の先生にご協力いただき、これだけのデータを収集し、本学の学生の英語に対する意識の全体像と属性による特徴を捉えることができた。改めてご協力いただいた英語1担当の先生方に感謝の意を表する。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省 a. 英語を公用語・準公用語等とする国（小学校における英語教育についての審議に関する参考資料）。2016年11月28日。<[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379959.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379959.htm)>.
- 2) Woodrow Lindy. *Introducing Course Design in English for Specific Purposes*. Routledge, 2018.
- 3) Internet World Stats. Top Ten Languages Used in the Web—March 31, 2020. 2020年3月31日. 2020年10月23日。<<https://www.internetworldstats.com/stats7.htm>>
- 4) 文部科学省 b. 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について。2017年12月13日。2020年10月20日。
- 5) 文部科学省 c. 大学の世界展開力強化事業。日付不明。2020年10月20日。
- 6) 名古屋芸術大学. 名古屋芸術大学 WEB シラバス。2020年10月18日。
- 7) 注2)と同じ。
- 8) 文部科学省 d. 参考資料2 大学入学者選抜改革の動向。2020年4月1日。<<https://www.mext.go.jp/content/000025257.pdf>>.
- 9) 深谷公宣, 小田夕香理. “芸術系学生のための英語教育のあり方.” 富山大学芸術文化学部紀要第10巻 [2016].

#### 参考文献

- Swan Michel (ed). *Learner English*. Cambridge University Press, 2001.
- 岡村光浩. “初年次教育・基礎教育についての一考察—神戸芸術工科大学における英語教育を中心に—.” 神戸芸術工科大学紀要『芸術工学2010』 [2010].
- 森本弘司. “EGP (English for General Purposes) カリキュラムと ESP (English for Specific Purposes) カリキュラムの特徴及び長所と短所—2つの大学のニーズ・アナリシス質問紙調査の結果にもとづく考察を通して—.” 同志社女子大学絵英語英文学会『Asphodel 48巻』 [2013].

#### Abstract

This paper aims to provide an overview of first-year-student attitudes' towards English learning, based on a survey conducted in May 2020 at a class of “English 1” at Nagoya University of the Arts.

About 73% of targeted students answered questionnaires regarding English study and their readiness. The result shows that the majority of students had a negative image in English and low self-confidence, but they were motivated to improve their skills, especially in the communicative area, and would like to become “English users” in the future. This survey suggests the importance of maintaining their motivations throughout the undergraduate course and possible ways of innovative educational practices.